

医療機関の薬不足 深刻化

去痰薬など9割が「入手困難」回答

医療現場での医薬品不足が深刻化し、医療機関の9割が「入手困難な医薬品がある」と回答していることが日本医師会の調査で6日、分かった。

「去痰薬」の入手が特に難しく、半数の医療機関が、発注しても納品されない医薬品があると答えた。調査は8～9月に実施した。院内処方をしている約3千の医療機関に入る手困難な医薬品があるか尋ねた質問では、90・2%が「ある」と回答した。薬の納入状況については、「発注しても納品されない」が49・7%あ

った。「遅延している」は26・9%、「発注数が制限されている」は18・4%だった。

入手困難の医薬品の上位30品目は、せき止め薬と去痰薬が半数を占めた。抗菌薬も手に入りにくい状況だった。

新型コロナウイルスや季節性インフルエンザのほか、様々な呼吸器の感染症が流行し、患者が増えていることが影響している。厚生労働省は9月29日、せき止め薬と去痰薬について、医療機関や薬局での処方を最小限に

構造的な問題もある。後発医薬品（ジェネリック）への置き換えが進み、多くの企業が参入したこと、「少量多品目」となつたが、製造能力が不十分な企業も多い。

調査結果を分析した神奈川県立保健福祉大の坂

巻弘之教授は「企業が増産するよう厚労省が的確な指示を出す必要がある」と話した。

供給不足に地域差は見られない」とが影響している。厚生労働省は9月29日、せき止め薬と去痰薬について、医療機関や薬局での処方を最小限にするよう、都道府県などに通知を出していた。

医薬品の供給不足には

(藤谷和広)